

西暦	年号	記事
一五九一	天正一九	眞宗大谷金竜山南台寺休西坊生玉角兵衛開基
一五九二	文禄元	文禄の役、秀吉朝鮮侵攻、津軽為信九州へ出陣
一五九七	慶長二	為信が津軽を統一した。 津軽六郡と平賀、花輪、田舎の三郡に攻めた。 慶長の役
一六〇〇	慶長五	秀吉再び朝鮮侵攻 関ヶ原の戦い、津軽為信東軍(家康方)に参加
一六〇三	慶長八	江戸幕府を開く、徳川家康征夷大將軍となる
一六一一	慶長十六	二代藩主津軽信枚、弘前築城にあたり津軽地方の諸宗寺院を弘前に移転させる。
一六一四	慶長十九	四月京都大阪のキリシタン信徒、津軽流罪と決る 五月二一日 敦賀出航 六月十七日 一行津軽の「同地についた」

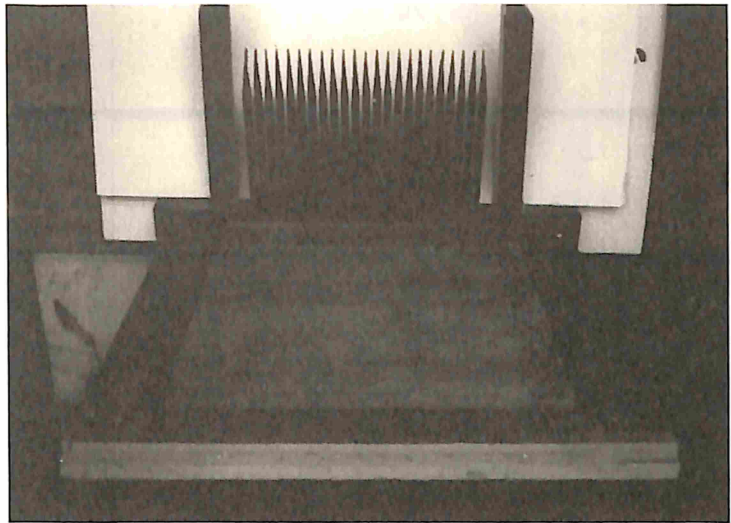
西暦	年号	記事
一六一五〜二三	元和年間	無格社蒔田金比羅宮勧請と伝わる
一六一八	元和四	津軽領下の切地帯に降灰あり、田地荒廃する 同地開発者を侍に取立て、新知士と称する(津軽編覧日記) 正月三日大雪、五日東風灰降る。 下の切とは、今の飯詰村より下をいう。
一六二八	寛永五	嘉瀬稻荷神社再建、創建年代不明
一六三三	寛永一〇	村社嘉瀬磯崎神社再建さる
一六三五	寛永一二	鎖国令、海外渡航禁止、海外にいる日本人帰国禁止
一六四〇	寛永十七	大船建造禁止 津軽領大凶作、十八年・十九年も大凶作
一六四五	正保二	飢饉が続き餓死者多数 曹洞宗金木山雲祥寺繁翁茂和尚開基 幕府諸国に御村高帳、国繪図の作

西暦	年号	記事
一五五八〜六一	万治寛文年間	成を下命 津軽藩領内知行高を幕府へ報告
一五五九	万治二	嘉瀬村五五石八斗、小田川村二六石六斗、中柏木村 四石一斗、川口村十三石(現蒔田)と文献に記録ある。
一六六四	寛文四	無格社喜良市円生川上神社勧請と伝わる
一六七二	寛文十二	別社金木神明宮再建さる
一六七五	延宝三	四代信政が古来の一郡に復し、更 に今までの三郡の境界を、そのま ま、平賀、鼻和、田舎の三庄に改 めた。 平賀、鼻和の庄は四遣 田舎庄は 七遣 十六遣 五所川原新田 五遣
一六六八	寛文八	村社川倉三柱神社勧請(正保年間 一六四四〜四七)の説もあり
一六七二	寛文十二	村社喜良市立野神社再建さる
一六八〇	延宝八	弘前藩士林源左エ門「嘉清」を 開墾して藩主信政より賞詞せらる (一統誌) 別社不動林「不動宮」今須村より

西暦	年号	記事
一六八一	延宝九	遷座 別社金木「愛宕宮」再建なる。
一六八七	貞享四	村落の分合を行い「遣」と「組」と改め、二五組にした。平賀庄を六組、鼻和庄四組、田舎庄十五組にする。
一六九二〜九五	元禄年間	元禄の凶作・餓死者一〇万余人
一六九四	元禄七	浄土宗朝日山照蓮院浄頓法師開創
一六九八	元禄十一	津軽四代藩主信政 津軽新田開発
一七〇五	宝永二	
一七〇五		
一六九八	元禄十一	金木、嘉瀬両八幡宮、新田開拓の 祈禱所となる。

ケガジと戦さと石高と

原田萬治



江戸時代と明治の代に使われた千歯扱、稲の脱穀に使用した

題名のように三つの項目をあげて記録することはあまりにも範囲が広くて掴み切れない恐れがありますが、三つに関連性のあるところだけ記していきたい。ケガジと戦は率直に言って人が死ぬことを意味していた。だからこそ戦国時代や、江戸時代のケガジは大多数の人に恐れられていたのである。

まずケガジのことだが平成十五年も不作であった。しかし今の日本では一年や二年のケガジでは人が飢えて死ぬことは先ずない。貿易の発達によって食糧を輸入したり援助を受けられる構造がしっかりと確立しているからである。ただ世界的な規模でケガジになれば話は別だが今のところは大丈夫である。

働くに働けず、お金がなくて餓死する人が今でも日本の国で表面に表れただけで四十人はあるという。しかも若い人が多いといわれるが、それは論外として、現代ではもし仮に穀物の収穫がゼロであったとしても流通機構が充実しているし、食に対する知識が豊富なるが故に単年度においては耐えることができると思われる。だが江戸時代では生活規模の態様が一度悪く作ると、本来の機能が麻痺して、弱い立場に置かれている階層からバタバタと斃れていくのだ。

ところでちょっと不思議に思うのは明治以前においては穀物を生産する立場にある百姓がケガジに遭うとイの一番に死の洪水にさらされるということなのだ。戦中戦後のあの食糧難、進駐軍を利用した叩き完納、いろいろな困難な立場に立たされても百姓で餓死した人はなかった。敗戦の年、昭和二十年は不作

でご飯に、ジャガ芋、シグサ等を入れ混ぜて炊き上げるのだが、その名はジウウシケと呼ばれていた記憶がある。ジウウシケのケは粥のことでケガジ用のご飯といわれ、冬の間中食べさせられ、遊び盛りの子供には腹持ちがよくなかった。

江戸時代の百姓はケガジに遭えば死を余儀なくされたのだろうか。ケガジに対する知恵がないのか、年貢による搾取が激しいのか、それとも平時の生活があまりに貧しいためなのか、爲政者の規制が普段から多岐にわたって締め付が強いのか、百姓但但で多少なりとも食糧を備蓄する習性がないのか、備蓄を禁止されているのか、大ケガジに遭えば痩せ衰えて斃れていくのだ。

私達の年代でケガジに見舞われたのは昭和五十五年、平成五年、平成十五年と三回で何だか五のつく年が厄を担ぐみたいで絃が悪い。

平成十五年の不作は全体からみれば金木地区は五分作で、七月の二十六、二十七日の東風の冷気によって穂孕期の稲が被害を受けたのである。従って稲の生育が進んだほど被害が大きく五月二十二日から六月五日頃までに遅植した稲は平年作に近い収穫を得ることができたことは稲作について何か暗示を与えているようである。

ケガジになっても今日の制度からいって共済組合による保険制度が確立し運用されるので、ある程度所得の保障で救われるから助かることができる。近代では大正二年のケガジも百姓は

悲惨であったという。金木村芦野の老農家夫婦は二町四反の田からの収穫はわずか四俵しか採れなかったという。ケガジ米は未熟米ばかりで食べてもおいしくないものなのだ。嘉瀬では刈取ることなく放棄された田圃はあちこちに見られ、品種によって収穫の差位が大きく現れたのである。ちなみに品種の名前を列してみれば次の別表になる。

(別表)		
金木地区の作付品種		
金木村	嘉瀬村	喜良市村
沖立	嘉瀬早生	細稗
嘉瀬早生	細稗早生	×辛抱
土用早生	晩細稗	五色
細稗早生	辛抱	細稗坊主
鎌稲	×仙台坊主	世界一
細稗	×相馬	鬼鹿毛
×長尾	×五色	相馬早生
×仙台坊主	黒糯	細稗早生
×鬼鹿毛	赤糯	五色
×辛抱		仙台坊主
五色		糯
黒糯		(×印は皆無作)
赤糯		

大正二年の大凶作といえは富山県の一漁村の主婦たちが米よこせで騒ぎだした動きが全国的に広がり一大米騒動に発展した記録に残る凶作の年であった。

大正二年に金木地区にて作付された品種について記憶されている方はないだろうが、気にかかるのは、金木と嘉瀬で植付されている嘉瀬早生という品種のことである。品種というものはその種を編み出した人か、地域の名を命名することが往々にしてあるものだから嘉瀬という苗字の人か、嘉瀬村の誰かが創り出した品種であったのかもしれない。しかも皆無作ではなく金木で三分作、嘉瀬で四分作と好成績を残しているのはおもしろい現象である。

米における稲の品種は明治時代初期には日本全国で四、〇〇〇を越えていた品種もいまでは一五〇を越える程度に落ち込んでしまっているという。

ケガジと云えば、かたりべでも何回となく記載されていますが、天明三年（一七八三）の悲惨なこの世の地獄は、餓死者が一〇万二千人、死に絶えた家屋が三万五千余軒、他国行八万余人、病死者三万余者と記録されていますが、享保十三年（二七二八）の検地の時、天明三年のケガジの五十五年前のことだが、嘉瀬、喜良市、中柏木、小田川の各村の平均家族数は六・一人であり、津軽藩内における各村の家族数も似たものと同類推できますので死に絶えた家屋が三万五千余だから、六・一倍で二十一万三千五〇〇人となり、餓死者と病死者、他国行を

いて江戸時代の人口と米のことを考えてみる。

江戸時代の単位のモノサシは非常に換算し易く、米一石は老若男女合せて一年間に消費する米の平均量である。米一石は今の一五〇キロで、現在消費している一人当りの米量の二人半に相当するのだが、成人の働き盛りの人は一・八石の米を消費していたのだという。一反歩からの米の収量は一石で、一年に消費する米も一人で一石、そして一石は金銭に換算して一両と実に換算しやすくできている。現在仮に一日一合の米飯を食べるとすると、一年では五四・七五キロでもう少し食べると六十キロ、一俵になるのだ。また一日三合の米を消費すると、一六四・二五キロで一石以上の消費になるのだ。食べる量のこととはわかってはそれでは一反歩という土地の広さは耕作者はだいたい目測でわかるが、そうでない人にはわからない。ところが一反歩が三六〇坪で収量が一石とすれば一年は三六五日だから約一坪からの収量で一日分として食べているのだ。江戸時代と今を通して一坪といえはだれでもが頭に描くことができるし、一反歩は一坪の三六〇倍の面積だと分かればみんな納得するのだ。江戸時代の働き盛りの成人一・八石の消費は一日五合とちよつとの量でそんなに多い量ではない。昭和二十年代までは働く大人ばかりではなく、伸び盛りの十代の子供を含めて五合の米は食べていたのである。血気の若者に至っては一升飯を平らげる人はさらにあったのである。こんなに食べても脂肪による腹膨れは見られなかった。

合わせて二十一万二千余人となって、死に絶えた家屋の人数と同じになるのはケガジによる死者の数は誇張では無く真実の記録であるのだ。金木、木造新田、赤田、広田の百姓の一〇、〇〇〇人が秋田へ離散したとあるが、果たして最後まで生きながらえることができたであろうか。

『天明三年十二月六日金木村、金助と申す者上在より初一駄調候面帰候所、中柏木に而盗賊四、五人出候而右金助打殺初並衣類を剥取候。』

この文から天明三年は金木地方でケガジであつてもどこかで未熟粒の初でも収穫できた地域があつたのか、それとも前年の備蓄の初が手に入ったのかはわからないが、天明二年も半作とあるからよほどの親類筋からやつと調達してきたのだが中柏木地内の所で盗賊四、五人によつて殴打され殺されたのち初と衣類が剥ぎ取られたことの記録であるがまことに残忍な話である。一駄とは馬の背中に乗せる分で二俵の量であるが、もうこの年は一〇月から餓死者がでていたというから、一駄といつても瘦せ馬の背中に乗せることだから八十キロ位の初であろう。それがもう一里で家族の待つている家へ帰り着くことができたのに無念の極みであつたにちがいない。その盗賊が中柏木村の居住者か、他村者かは判別できないが、食に対して気が荒んでいればだれが追剥になつてもおかしくはない時節であつただ。

稲作は縄文晩期に伝授されたというのが遠い昔の古代はさておき、津軽藩で天明三年は目を覆うばかりのケガジになつたが、天明元年には稲に実が入らない青作、また天明二年は半作であつたが、藩における時の参政（執政の次に位し政治に参与する職で俗に若年寄）大谷津七郎は衆議にかけることなく、御倉米や、百姓から無理に取り上げた米を天明三年の春に大阪廻し二十万俵、江戸御廻米二十万俵を輸出したのだ。従つて領内の備蓄米は皆無となり天明三年の十月には餓死者が続出したのである。歴史にはもしという言葉は禁句らしいが輸出された米が半分でも残つていれば領民、とりわけ百姓は冬を越すことだけは可能であつたのである。冬を越せば草木も伸びるから何とかなるものだ。ところが津軽藩としても借財がかさみ十五万両という大金だが喉から手がでるように必要であつたのかもしれない。

人とライオンが同じ

江戸時代には日本の人口が二千万人と計算されている。徳川幕藩制三百年といわれるが実際には二百六十年余で、人口は殖えなかつた。人口が殖えないということは出生児があつても育たないということなのだ。江戸時代と云えば津軽藩も含まれますが、五歳までに生きられるのはたつたの二割であつたという。これは上層階級、下層階級と問わず一〇人産んでも二人しか生存できる力がなかつたからである。一方ライオンは百獣の王と云われても成獣になるまでは二割しか生き残れないからだ。大

人のライオンになるまでには他の肉食獣に喰われてしまうからである。人の場合は疾病や栄養不足等で五歳で二割だから大人になるまでは二割を切つて、ライオンより生存率が落ちることになる。享保の時代に嘉瀬近辺の四つの村の平均家族数は六・一人で、平均耕作反別は一町五反で、働く人が最低でも三人は必要になってくる。従つて一戸の中での子供の占める割合は多くて三人普通は二人だから人口が目に見えて殖えることはなかった。私達の先祖の例でもこのようであるから、日本全国江戸時代は人口が殖えなかったのは事実で、殖えたとしても微増で、だからこそ鎖国をしても徳川幕府は持ち堪えることのできたのではないだろうか。

戦はいつの時代でも人間社会の最大の悲劇であるが、一〇〇年間も続いた戦国時代はよくもまああちこちで戦の名のもとに殺しあいが続いたものである。武力の強い者が力の弱い者をねじ伏せるのだ。戦の主力は武士であるが、武士として主君のために闘っているのではない。敵を斃すて領地を奪えば恩賞として土地を貰うことができるからである。土地、即ち領地はただの荒地のことではなく、そこに人が住み何かを生産する手段を持つてゐる場所のことで、米、木材、織り物、魚等、生活物資が産出されることで、これらの物資を「租」の形で取り上げることができからである。こうして租と傭を自由に支配できることは他に比して生活が豊かになり自分の栄華を極めることができるからである。

で六十二俵の炊き飯とは想像することさえちよつとできない。

戦国時代には日本国中武士だらけのように見えるが以上のように九割が武士以外の人達で戦闘の構成を成していた。戦いは私達が今思うより呑気なものであつたかもしれない。

それでは江戸時代には武士がいくらいたのだろうか。それは一万石に対して二五〇人の割で武士を抱えていたというから一万石以上の領地を録領していれば大名と呼ばれ一万石以下は旗本と呼ばれたが、旗本は徳川家独自の家臣のことだがこれは旗本に与えられていた領地は天領という名で通つていた。天領は北海道を除く日本全国に散在していた。

江戸時代の人口が二千万人、そのうち武士の人口が五％、六％、町民が五％と云われているから、武士が五％で一〇〇万人、六％では一二〇万人、町民は一〇〇万人である。

武士と町民を合せて一割余で二〇〇万人余であとは主に百姓である。日本全国で米の生産一、八〇〇万石、雑穀四〇〇万石で合せて二二〇〇万石は平年作ではあり余るほどの生産高である。

徳川將軍家の石高はふつう八〇〇万石というのがその半分は旗本に与えられていた。

徳川家の天領以外の収入源、四〇〇万石は、五公五民の年貢としても二〇〇万石、二百万両になるのだ。二、二〇〇万石のうち、八〇〇万石は徳川將軍家のものとして、残り一、四〇〇万石が各藩の録高になるのである。藩のなかでも加賀藩は一〇

もちろん主君の爲の忠誠心もなくてはならないが、自己の利益（役と録高）の予約が約束されていなければ、いくら武士とて命をかけて戦う阿呆は一人もいないだろう。

よく戦国物語に武田信玄方何千、上杉謙信方何千と闘う武士の人数を現わしているが、果してこれだけの武士が集まったのだろうか。実際はほんとうの武士、つまり戦闘員は一割しかなかったという。あとの九割は百姓、町人などを狩り集めた戦闘援護者なのだ。

百姓を集めるとなるとどうしても農繁期を避けて戦わねばならない。事実武田にしても上杉にしても百姓の忙しくない時期を見計らつて闘つていたのである。武士は武士だから戦闘死して当然かと思われがちだが、それは全く違つた見方で何よりも死を恐れたという。武士でさえ戦いの最中でも自己の身の安全を第一義としているものだから、五分と五分の力で対峙しても、百姓を交えているものだから、ちよつとした弾みで総崩れになることもある。だれでも命が惜しく死を恐れるから逃げ散つてしまうのであるという。

居城の戦なら食糧の蓄えがあるから互角の戦力であれば一月や、ふた月は持ち応えられるだろうが、野営の戦闘はまず闘うよりも食糧の確保である。戦闘地域において現地調達もままならず、戦闘食もあつたろうが、五千の兵の食の支度は容易ではなかつたはずである。兵一人五合の消費として五千の兵であれば一日二十五石の米が必要で、鍋や、蒔、水等が是非とも必要

〇万石ですから、天領を除く徳川家の四分の一にあたり栄耀栄華を極めた藩公に違いない。

一万石以下から五〇〇石取りまで旗本で、その下は御家人という。云つてみれば旗本御家人は幕府直属の親衛隊で、俗に講談などで旗本八万騎などと語られているが、かりに旗本、御家人八万人あつたとすれば一人五〇石として四〇〇万石となり、講談で語られている旗本の数はそんなに外れていないのである。御家人によくある三十俵二人扶持の役とは二人の僕を備うことができる身分で、一人扶持とは一日五合の米が支給されることなのである。御家人の給与は扶持米を入れて満額支給されても十五石余で、五石を自家消費してあとの一〇石は販売して換金できるのだが、一〇両で一年の生計を維持することは大変であつたろう。天領は全国的に散在しているので江戸時代も中期にさしかかると、天領の年貢は現物と金と両方でむしろ金納の方が多くなつたが、金納だと豊作の年は米の値段が下がり、それを納める百姓は二重の苦しみを受けることになるのだが、家康の言葉として「郷村百姓共をば、死なぬように生きぬ様にと合点到し収納申付る様」とあるのは百姓は死なぬよう、生きぬように年貢を取り立て財の余らぬようにと達しているのである。百姓はいかに苛酷な農政の巻き添えの上に立たされていたかが分かるのである。

津輕藩は藩祖爲信の頃は四万五千石であつたが、開墾に開墾を重ね、まもなく十萬石となり宝曆（一七五一）の代には実質

四十万石となり、文祿元年（一六八八）に四万五千石と認知されてから六十二年で約九倍の石高になったのには驚かされる。

藩祖爲信から十二代承昭までの殿様の名前を記してみると、爲信、信枚、信義、信政、信寿、信著、信寧、信明、寧親、信順、順承、承昭、となつてはいるが、名君もあれば、落語にでてくるような馬鹿殿様もあった。初代はこの藩でも英雄豪傑ですぐれた武将であつても何代目かにはおかしな殿様がでてくる。二代、三代、五代、十代と愚行をくりかえす、諫言をする忠臣を斬つたり、酒乱や、城下町を踊り浮かれていたり、ちよつと今では理解することが困難な行動の持主もあつたのだ。それでも津軽正中央には殿様の悪態が隠蔽されすべて良き殿様として記述されているのである。いつの世でも上の者には御無理ごもつともと、ゴマスリの重臣や、臣下が多いと後世の笑いものになったり、蔑まれたりよくも転封や改易、取り潰しにあわなかつたものと思う。

宝暦の頃の津軽藩の人口は二十五万人となり石高も実質四十万石となれば藩財政も余裕があり比較的安定の時期でもあつたと思う。

四十万石の産出高で二十五万人の人口だから十五万石（三十七万五千俵）の輸出が可能になる計算だが米をつくる百姓の暮らしのじみさは続くのである。だが腹いっぱい食べられることは幸せであつたかもしれない。

宝暦一〇年の津軽藩の家臣の奉録は役方（行政）の家老で八

らないが二万石の八戸藩でさえ一〇〇〇石の収納があつたくらいだから、津軽では四十万石にたいして、現在の西、北、五が真の皆無作でも中、弘、南、黒の地域で十分の一ぐらいの収量はあつたものと思われる。なぜなら天明三年初めには藩内の人口が二十五万人余で二十一人が餓死、病死、離散しても、残された四万人の食糧は持つていたはずである。平年の年であれば四万石の米が消費されるのだが、ケガジの緊急時だから半分の消費としても二万石はあつたのだ。つまり二万石の米を年貢として集めていたのである。藩の蔵米は輸出して無くなつていたらうが、豪農、豪商は備蓄米を保有していたと思われから二万石プラス？石で一年を越したことになる。豪農、豪商と云つても武士でないからたいしたことはないだろうと思うが、享保一一年（一七二六）頃には藩の財政を凌ぐ勢いで藩の眞加金や、御用金一万両を割当られ、難なく収めているのだ。剪じつめて考えれば百姓は、二重の苦しみを味わされていたのである。

終りに農業について断片的な話であるが、アメリカでは五百町歩の水田では経営上無理で一千町歩以上の耕作でなければ難しいといわれているが、一方ベトナムでは貧しいけれど二反歩の水田を耕作していれば生きていけるという。日本の農業と比較して、日本は豊かであるが心は貧しく、ベトナムでは貧しいけれど精神的に豊かであるということは何かを示唆しているかもしれない。

〇〇石、番方（軍事の城代家老で五〇〇石、町奉行で一五〇とそんなに高い奉録ではないが、この頃は実質四〇万石を越えていただろうから、少なくとも五千以上の武士を抱いていたのだから、一人二〇石平均としても軽く一〇万石は出てしまうのである。十五万石の輸出をしても一〇万石分は奉録として消え、津軽家で利用できるのは五万石で五万両の小判が使用できるから遊び呆ける殿様もでてくるのだろう。

宝暦の代から天明のケガジを経て

八二年後の天保（一八三三）四年から一〇年まで続いた凶作によつて、また餓死者三五、六一六人、他散四七、〇四〇の人の八万余人で、ケガジになれば飢餓街道に立たされるのはいつも働く百姓で豪農や豪商、武士達はいつものうとうと生き長らえる制度であつたからである。天明三年の他国行八万余と天保の四万七千は地理的に近く冷害の影響が薄い秋田の方面に他散したと思われるが、のちに津軽は帰つた人もあろうが大半の人は秋田に居着いて秋田の地に骨を埋めたであろう。ケガジでは関所の役人も、逃げゆく人の数の多さに抑えることができなくても帰る時になると関所の機能は平常に回復するので困難になるのである。天明と天保の代でも津軽藩内のすべての地域で文字通りの皆無作ではないのだ。なかには反当り一斗の粉や種粉ぐらいは収穫できた地区もあつたのだ。天明三年のケガジで津軽藩でどれだけの年貢を集めたか資料が見つ

津軽言葉の謎

その五、津軽語は、濁音が多く使われ、発音の区別が明確でない。津軽弁は、一般に簡潔を旨とすると言われてはいるが、濁音が多く使われる柿（かき）を「カギ」、砂糖（さとう）を「サド」という。

また、「イ」と「エ」、「シ」と「ス」の発音の区別が明確でない。津軽弁の中には、アイヌ語、古語等混合されているからだろうか。

しかし、我々津軽人には、濁音も発音も、何の違和感も不信も感じない。

(K)



小正月は地獄の閻魔大王や、赤鬼・青鬼の仕事初めの日で、地獄の釜の蓋が開けられる日だと言う。

この日嘉瀬の妙光庵では、お掛図と言

う地獄極楽の御曼陀羅が開帳される。

大東亜戦争終戦時までこの御曼陀羅は、婆様が孫達に説教をする教材であつた。

「悪い事セバ、赤鬼ねかて、針の山さ追れる」「ウンせば、青鬼ねかて、舌抜がれる」「人殺せば、釜で煮らいるデアー」と、婆様に教えられるので、その時ばかりは孫連中「イグネエ事シネエー」と、一時的に素直になつたもんだ。

(あきもと)

会員名簿

会長	木村治利	(編集委員)
副会長	山中長三郎	(編集委員)
"	高橋健一	(編集委員)
会計	葛西敏江	(編集委員)
事務局	小山内トモ子	(編集委員)
監事	櫛引八千代	(編集委員)
"	木下清一	(編集委員)
"	須崎悠悦	(編集委員)
"	石戸谷恵子	(編集委員)
"	木下俊蔵	
"	逢坂伸三	
"	原田万治	
"	沢田薫	
"	畑山正栄	
"	田中操	

赤鉛筆

百姓の原稿書き逝く



昭和五十六年六月一日かたりべ第一集誌に『随想語り聞き』の原稿を私のところに持ってきたのが、秋元惣之進氏の原稿書きの初めであった。原稿を書きあげると、とにかく私のところに持ってきて「これだばマイネベ」と。たしかに彼の原稿は泥臭い原稿だが、「百姓の生活」を最後まで追い続け、平成十八年三月七日、遂に旅立った。私は葬儀壇上の肖像写真に向って、「原稿取りに行くがらナア」と、問いかけていた。(合掌)

|| 編集主幹 きのした清一 ||

かたりべ第十七集

発行 平成十八年四月

発行所

わがふるさとを探る会

(電話)

発行人 木村治利

編集人 きのした清一

印刷所 朝日印刷

五所川原市鎌谷町

(電話三四一三三二六)



五所川原市立図書館



008016102-9